『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

真実との出遇い

―ひびき合える世界を求めて―

渡邊顯信

Ⅰ　はじめに ―問題の所在―

三村学長先生から過分なご紹介をいただき、身が細る思いでおります。私に与えられました内容についてお話を申し上げたいと思います。

開会にあたり、司会の松本先生が「三〇秒ほど黙想」とおっしゃいました。京都光華女子大学・短期大学部という大学の基本姿勢を端的にお示しくださったことを感じました。

皆さんは、「禅」をご存じですね。正式には「禅定」といいますが、この言葉は「静かに思う」という意味です。日常のいろんなことの中で、時には静かに自分を省みる時間がほしい。それも「禅定」の一つのあり方です。

昨夜金沢におりまして、夜のテレビニュースで、「イラクで戦争がまた別な形で始まっている」と聴きました。その直前に小泉首相は、「イラク戦争は終結した」とコメントしていました。立場や状況により、一つの事象に大きな相違があることを、改めて痛感させられました。いづれの観点がその事実であるかどうかは、各自で判断するしかないと思います。

今年、二〇〇三年（平成一五年）は、私の存じあげている二人の方の一〇〇年という年でした。一人は、没後一〇〇年の作曲家瀧廉太郎で、「荒城の月」や「花」の作曲者です。二三歳で若死していますが、この「花」は、日本で最初に西洋音階を用いた二部合唱曲です。もう一人は、一〇〇年前の一九〇三（明治三六年）年生まれの詩人金子みすずという詩人です。この方も二六歳で亡くなりました。大正末期西條八十に私淑し詩作に励んでいましたが、生前は一部の人にしか知られませんでした。近年

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

はどんどん紹介されるようになってきていますので、皆さんの中でご承知の方も居られることでしょう。大正末期から昭和最初期の作品ですが、非常に平明な詩ですので、二編ほどご紹介します。最初の一編は、「星とたんぽぽ」です。

青いお空の　そこふかく、
海の小石の　そのやうに、
夜がくるまで　しずんでる、
昼のお星は　めにみえぬ。
　見えぬけれども　あるんだよ、
　見えぬものでも　あるんだよ。

ちってすがれた　たんぽぽの、
かわらのすきに、だァまって、
春のくるまで　かくれてる、

つよいその根は　めにみえぬ。
　見えぬけれども　あるんだよ、
　見えぬものでも　あるんだよ。

もう一編は、「私と小鳥と鈴と」。

私が　両手を　ひろげても、
お空は　ちっとも　飛べないが、
飛べる小鳥は　私のやうに、
地面(ちべた)を速くは　走れない。

私がからだを　ゆすっても、
きれいな音は　出ないけど、
あの鳴る鈴は　私のやうに

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

たくさんな唄は　知らないよ。
鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

人間中心になり易い観点を見事に超えた深い感性、こういう詩が数多く残され出版されてもいますので、図書館ででもご覧になってみていただければと思います。

このように、二十数年の短い人生を一生懸命に生きた二人の、一人は病死、一人は残念ながら自分の信条を通すために自死しましたが、そういう二人の没年、そして生年一〇〇年にあたる年になります。このようなことは、いつの時代にも誰にでもあり得ることですね。申し上げたいことは、人間の一生というのは、本当にその時しかありません。さきほど学長先生もおっしゃられたようにその時、その時を精一杯生きるしかありません。そういう意味で、今日の講題を「真実との出会い—ひびき合える世界を求めて—」とさせていただきました。

1　生命（いのち）の実感 ―最近の世相から―（現代の諸問題と佛教の役割）

二年前の九月一一日、同時多発テロ発生からアフガニスタンへの報復攻撃的空爆開始、それが終焉しないうちにイラク戦争の開始。そして現在は、アフガニスタンで、また問題が発生し、更には、「イラク戦争終結」という小泉首相のコメント直後の「イラク北部での民族抗争開始」など国外の政情不安がつづいています。

幸いなことに、日本国内では、民族抗争や内部抗争での戦争、殺し合いはありません。しかし数日前に、福岡での一家四人殺害事件が発生し、現在捜査中ですね。こういうことが平和であったはずの日本の中で生じてきております。その原因は何なんだろうか。皆さんは一八、一九、二〇歳の若い時代ではありますが、そういうことを少し考えてみることも、これからの自分の人生を深め、広げていくために大切な要素かと思います。

もう一つ、去年初めの頃、アメリカのネイティブの詩人の詩が話題になりました。『全世界を一〇〇人の村にたとえたら（世界がもし一〇〇人の村だったら「If the world were a village of 100 people」）』という詩が話題になりました。ご承知の方も

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

いらっしゃいましょう。

「その村には五七人のアジア人、二一人のヨーロッパ人、一四人の南北アメリカ人、八人のアフリカ人。　五二人が女性、四八人が男性。　七〇人が有色人種、三〇人が白人。　七〇人がキリスト教徒以外、三〇人がキリスト教徒。七〇人は文字が読めず、五〇人は栄養失調。

そういう中で　コンピュータを所有しているのは一人。」

このような内容の詩が発表されました。それがインターネットで流れるうちに、各国で修正されたり付け加えられたりして、いろんなパターンになったようです。特に「五〇人は栄養失調」とか、「三〇人の白人、コンピュータを持っているのは一人」という文明、科学技術の中で現在の全世界が動いています。こういう一部大国主義の論理の中で、弱小国の罪もないアフガニスタンの人々や、イラクの人々の生命が奪われているのです。つい数年前には、アフリカやヨーロッパでも民族抗争がありましたね。国益や、経済論理優先の姿勢が、生命に対する基本的感覚を麻痺させてしまうのでしょう。

日本では、戦争ではありませんでしたが、阪神・淡路大震災の時に、多くの方々が亡くなられました。倒壊したものの下で圧死されたり、脱出しきれずに焼死されました。生き死には紙一重ともいわれますが、実は別なことではなく、表裏の事象なのですね。そういうことを考えますと、私どもは現代の世相を「人ごと」という形で傍観してしまうのではなく、「自分の問題」として受け止めていく意識が大切なのですね。そのような姿勢に立てるかどうかに、自分の人生の岐路が、浅深がかかっているともいえましょう。「人は、無意識の内に相手の直前を平然と横切っている」ともいわれます。相手の前を横切りかねない自分の言動に気づけるかどうかも、今後の人生を左右することでしょう。

その方法の一つとして、一日のひと時でもいい、さきほどのように個々人が「黙想」とか「瞑想」で、自分自身を省みられることをお勧めします。皆さんの将来は明るいものになるだろうと思います。私は皆さんにとっては親の世代のものですが、多くの失敗や痛みを重ねた「元若者」の言葉として、記憶の一端に止めていただければ、こんな幸せなことはありません。

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

もう一度確認しておきましょう。非常にゆったりと流れていた人類の歴史が、一六・一七世紀の産業革命以降、技術革新により、特に二〇世紀の科学技術発展時代ともいわれる凄まじいほどの「モノの豊富な時代」をつくりあげてきました。その結果として人類は、第一次世界大戦、第二次世界大戦という犯罪を、大きな殺人行為を二つも犯してしまいました。その反省にもとづいて数十年前頃から、「二一世紀はモノの時代から、心の時代に移行すべきだ」とも言われ、人類の叡智の実現が期待され始めていました。

ところが二一世紀に入って早々の九月一一日の同時多発テロに始まるアフガニスタン攻撃、そしてイラク戦争など、ともに一部大国の「正義の戦争」という大義名分による制裁や、「傘下に組しない相手の存在否定と抹殺の論理」の行使……。

一昨日のテレビでしたが、アマゾンの裸族のルポがありました。その中で少数民族の言語さえ通じない二人の男性が放映されました。それを取材している日本人が、ふと思ったのは「この二人が亡くなったら、彼らの言語も文化も失ってしまうんだな」と。確かにこの二人は、類似の他のマイノリティの中にも入っていけませんでした。

最初のうちは、ある程度受け入れた部族もありましたが、続きませんでした。その世界にはもちろん戦争はありません。しかしこの事実に対して、我々「文明人」と自称する民族や部族は、如何なる方策も為し得ず、「戦争抑止力」の名目で、結果的には相手を抹殺する「大量破壊兵器の拡散」という愚行を重ねているのです。

この事実を佛教はどう見ているのかと思ったものですから、「問題の所在」として「―最近の世相から―（現代の諸問題と佛教の役割）」と書いてみました。佛教徒がどうしたからといって、ブッシュ大統領が自分の政策をコロッと改めることはないでしょう。アフガニスタンやイラクの問題も簡単に解決はできないでしょう。佛教徒でも戦争を起こした時代もあります。そういうことを思いますと、本来、佛教とは何なのか。その前に、宗教とは何だったのか、ユダヤ教、キリスト教は同族関係の宗教であり、イラスム教も類似の関係にあるのに、その中でなぜ争わなければならないのか、殺戮を繰り返さなければならなかったのかということを、次の問題として考えてみたいと思います。

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

2　宗教とは何だったのか？「その本質的語義と慣例的語義」

「宗教」という言葉と「Religion」という言葉は明らかに違うということだけは、ぜひ記憶に止めていただきたいと思います。「宗教」の本質的語義を確認しておきましょう。「宗」は「本源」とか、「最善」最もすばらしいもの、「完成されたもの」という意味の言葉です。サンスクリット、パーリ語で言いますと「Siddhānta」という言葉で、「完成の終極、成就の極み」を意味する言葉です。その「宗の教え」、それが宗教でした。お釈迦様、釋尊（釋迦牟尼世尊）の出家まえのお名前は、Siddhattha（梵語 Siddhārtha）で、直訳すれば「究極の道理、完成した意味・目的」と言う意味です。「色々な問題を解決できる人になってほしい」という親の願いが込められた名前でありましょう。

佛教とは、「Buddha 自覚者（真実を覚った人［=動詞√budh（目覚める、悟る）-ta（過去受動分詞）］の教え）、すなわち究極の事実に到達し、真実に「目覚めた人の教」のことでした。

次に「Religion」の本質的語義を確認してみましょう。

「Religion」の語源は二説あり、「接頭辞 re（再び）＋動詞√leg（拾う、読む、集める、観察する）＝relegere」からの「religio」と、同様に「接頭辞 re（再び）＋動詞√lig（結ぶ、縛る）＝religare」からの「religio」とです。ラテン語「religio」の原意は、ともに、追放されたアダムとイヴの子孫である迷える子羊「人類」を、父なる神の恩恵によって「再び集め、結合させる」関係のことです。

慣例的には、キリスト教などのように神の恩恵や寵愛による「啓示（Revelation）の宗教」と、佛教のように自分自身の覚醒を知らしめる「目覚め（Buddha［自覚］）の宗教」とに大別されています。

明治最初期、初めて「Religion」という言葉に出会った日本の翻訳者たちが、充分な検討を重ねる余裕もなく身近にあった「宗教」を当てはめたのでしょう。それ以降日本ではキリスト教もイスラム教も佛教も、すべてを「Religion」と理解してきましたが、正確にはそうではないのですね。

以上「宗教」と「Religion」という言葉の相違を申しあげたのは、優劣を論じるためではなく、事実を各自の中で修正願い再確認していただきたいとの願いによるもの

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

です。

3　佛教とは何だったのか？「その本質へのアプローチ（「基本的佛教用語」の確認）」

いづれにせよ、明治以降の「宗教」や「佛教」理解の流れの中で、それらが人間にとってどういう役割があったのか。果たすべきあり方はどうなっているかということが、十分に伝わらないままで来たのが、現在までの状況だったと思われます。

お寺は、決してお葬式だけをする場所でも、お年寄りだけが行くところだけでもありません。自分にとり何か問題が起きた時に気軽に相談に行ける場所、それがお寺の本来のあり方でもありましょう。最近よく「ビハーラ」という言葉を耳にされることがあるでしょう。終末のケアのあり方として、ビハーラの言葉が使われますが、本来「ビハーラ Vihāra［語源 vi＋√hṛi（運ぶ、疲れる、持ち去る）］」は、サンスクリット語やパーリ語で、「休養する場所、安らぐ場所」という意味です。安んじて相談に行ける場所のことで、寺院を意味する言葉です。そこには死を迎える場所とか、金儲けを教授してくれる場所というような意味は全くありません。人間として安らいでい

ける場所、心身の疲労や悩みから離れる場所、それがビハーラです。人によってはお寺であり、神社であり、教会でありましょう。

特に昭和二〇（一九四五）年八月一五日以降、日本の教育体制は、新民主主義教育体制への変換のため、過去の日本の文化を、宗教教育さえも軍国主義に直結するものとして、破棄あるいは軽視してしまいました。目先のことにだけ目を向けざるを得なかったのは、当時の日本としてやむをえない事情もあったのかもしれません。幸いなことに数十年前から、その体制の問題点が指摘されはじめ、伝統的日本文化への見直しが注目されつつあります。

皆さんもご存じのとおり、島津製作所の研究員の田中耕一さんがノーベル賞を受賞されました。特に最近は、力関係やコネクション、裏面での集票工作などによる表彰や受賞、金権による各種議員就任という事態が少なくありません。営利中心の功利主義が横行している世相だけに、田中さんの最初の発言は極めて爽やかでしたね。「私のような者が受賞していいんですか」と。私はそういう人こそ、文化勲章などの顕彰にふさわしい、そして周囲の方々が適格者として紹介する資質のある方だと思います。

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

しかも田中さんは、立派な英語を話されるのに、「これからの研究論文は、日本語［夫々の母国語］でも発表できるようになって欲しい」と意見を述べておられましたね。精神文化も含めて、夫々の国の伝統ある文化を大切に育てることの重大さを提言してくださったようにも拝聴しました。このような人材こそ、充分に評価されるために、日本の文化行政水準のレヴェルアップを強く願ったことでした。その理由は、田中さんの研究を的確に評価したのは、日本の関係者ではなく、ノーベル賞審査関係者の方々でしたから。

もちろん海外での評価は名誉あることですが、今回の異常なほどの過熱的評価現象は、日本人の「熱しやすく冷めやすい」特性によるだけではなく、文化的水準から反省すれば、日本の科学技術評価が貧弱であった結果ではないでしょうか。

本論に戻りましょう。最近の憂うべき社会現象に対して、「佛教にはなんら責任は無いと断言できるだろうか」との自問自答から、「佛教とは何だったのか？　その本質へのアプローチ（「基本的佛教用語」の確認）」との項目をたてました。時間の関係でレジュメの項目を簡単に紹介します。

1 《縁起 paṭicca-samuppāda, pratītya-samutpāda（prati-√i-tya-sam-ud-√pad）》：すべての事象は種々な要素が集まって生じているもの。

2 《無常 anicca, anitya（a-nitya）》：すべての事象は常なるもの（nitya）ではなく変化するもの。

3 《無明（無知） avijjā, avidyā（a-√vid-ya）》：「迷い・苦しみ」の根元・原因は、「真実（真理）」に暗いこと。

4 《真実（真理、諦） sacca, satya（sat［ppr.√as］-ya）》：真実であること、明かなこと。

「真実とは真理と実際［現実］とを融和させるものである。理を尽くし情を尽くせるものであり、それは 我らの光となり 命となるものである。金子大榮」

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

Ⅱ　真実との出遇い ―「佛教音樂」を通して―

一番大事なのは、常に「自分がどうあるべきか」「自分の本質は何か」を問うていく姿勢でありましょう。先程「黙想」の言葉から「禅定」引用して、「現代の世相」に触れました。私がこちらに伺ったのは、皆さんが行き詰まったり、挫折したとき、「そうだ、お寺に行ってみようか、教会に行ってみようか」というような気持ちに転換していただくお手伝いにでもなればとの願いのためです。

1　人生と音樂 ―人間にとって音樂とは？―

太古の昔から人間にとって音樂は、喜怒哀楽を表現する手段でもありました。特に中世・近世には、キリスト教的文明論や文化人意識から、他民族をより低い未開人との判断をした時代が続いたこともありました。しかし現実には、夫々の民族に、未開人という烙印をおされた部族にも、特有の言語や音樂などの文化がありました。実際

に東南アジアにある多くの言語や文字文化については、あまり知られていませんでした。世界の中にはいろいろな音樂があり、決してキリスト教文化圏中心の、いわゆる西洋音樂だけが主流なのではありません。

そういう意味でも、二一世紀からは「三〇％の白人、一〇〇人の中の一人のコンピュータ」という偏った力関係での判断基準は、改められなければなりません。

ところで、音樂というものを私はこう理解しています。「音」には、自然界の発する音や、人工的な音を含め、樂音や騒音など多種多様の音がありますが、私が申しあげたい音は、「本当のひびき」ということです。本当のひびき、それが音樂の「音」。その場合の音は、耳に聞こえるものが主ですが、聴力障害者の方にとってはあまり意味がない。スピーカーを通し強調した振動する音などは体で感じられるそうですが、それもあまり重要ではない。また、言語が違う、言葉が通じないけれども相手が何を言おうとしているのか、相手の喜怒哀樂の感情がよくわかる時もありますね。

そういう意味で、「本当のひびき」とは、音波を介したひびきだけではなく、「心同士のひびき合い」とか、「感性の交流し合う関係」、それが「本当のひびき」であり、

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

「音」であると理解しております。

つぎの「樂」は普通は「樂しみ」と読みますが、この意味以外に「樂」の字には、親鸞聖人も使用されておられるように「願う」という大切な意味もあります。「本当のひびきを願う世界」、それが「音樂の世界」であると思います。

2　佛教音樂

ところで釋尊にとり「音樂」とはどのようなものだったでしょうか。一般的に佛教では歌舞音曲を否定しているように理解され易いですが、「涅槃・寂静（= nibbāna, nirvāṇa）」の妨げになるような享樂的舞樂を容認されなかっただけで、むしろ「こころに響く悟りにかかわる音樂」は、賞賛されています。

私は、縁あって佛教とのご縁の中に育ち、その一分野である釋尊時代の佛教学を少し学んでまいりました。釋尊が使われた言語は、パーリ語に近い言語であったと考えられております。經典の記述事例として、パーリ語の經典を紹介しましょう。

『パーリ語原典：長部經典 Dīgha-nikāya xxi『帝釋所問經 Sakka-pañha-Suttanta (1.6)』

Evaṁ vutte Bhagavā Pañcasikhaṁ Gandhabbaputtaṁ etad avoca:

Saṁsandati kho pana te Pañcasikha [beluva-paṇḍu-viṇaṁ] tantissaro gītassarena gītassaro ca tantissarena, na ca pana te Pañcasikha tantissaro ativaṇṇati gītassaraṁ, gītassaro va tantissaraṁ.

この様に歌い終わったので世尊はガンダッバ［音樂神］の子パンチャシカに次のように言われた。「パンチャシカよ、汝の［弾いたベールヴァ製の黄色いヴィーナの］絃の音色は、［汝の］歌のそれと調和し歌声は絃の音色と調和していた。しかもパンチャシカよ、［汝の］その絃の音色は歌の音色に勝らず、歌声は絃の音色に勝ったものではなかった［……云々］」

パーリ語經典の後半では、更に敷衍して次のように説示しています。

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

「如来を称讃し（Buddhupasaṁhita）、美しくしとやかな演奏で人心を感動させる響きがあり、衆義つぶさに有り（Dhammupasaṁhita）、聖者の事を説き（Arahantupasaṁhita）、又清浄な行動（brahma-cariya）を説き、沙門（samaṇa 出家修行者）や欲縛についても説き（kamupasaṁhita）、涅槃（Nibbāna 寂静）［の境地］を表現していた」と。

この記述から私たちは、釋尊が「パンチャシカの演奏内容」は「悟りを求める姿勢」であり、佛教音樂表現における声樂と器楽の優劣関係をも超えた「調和した演奏、涅槃寂静の境地を表現していた」との実例として讃えられた事実を知ることができます。

次の「結集（けつじゅう〔釋尊没後の經典編纂会議〕）」について、少し説明しましょう。

「結集（Saṁgīti: sam-√gai［共に歌い合う］）」:singing together, concert, symphony.

釋尊の入滅直後（B.C. 486 頃）、その教説の混乱や散逸を懸念した弟子達の間で、

教説確認の会合が開かれました。「第一結集」と言いますが、社会運動などで言う「結集（けっしゅう）」ではなく、「結集（けつじゅう）」と言い、佛典編纂会議のことです。その原語がサンギーティ Saṁgīti で、「一緒に合わせる、確認し合う」という極めて民主的な会議姿勢ですね。

合唱音樂をライフワークの一つにしている私には、この「Saṁgīti」の精神は、アンサンブルにも相通じるひびきとして、常に有難い経験を味わっております。

3　佛教音樂　その流れ

当然のことながら、佛教音樂の伝播経路は、經典の伝播ルートに重なります。大別して南伝・北伝の二系統に分けられますが、釋尊入滅一〇〇年頃には、戒律の解釈相違からその整備を主題とした第二結集が開催され、上座部佛教と大衆部佛教の二大根本分裂期を迎えています。

上座部佛教は南方で展開され、南伝佛教系のパーリ語經典を所依としています。

一方大衆部佛教の多くは北方に伝播し、カシュミールやネパール、チベット、中国

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

などで展開され、サンスクリットを中心とした典籍が多く、チベット語譯經典、漢譯經典、その他の言語譯經典を所依としました。もちろん、僅かながらパーリ語經典も伝わっております。

ご承知の通り、古来から日本では、佛教伝来のあり方を「三国（インド、中国、韓国）伝来」と言う表現で伝えられて来ています。もちろん東南アジアから海路を通して伝わることもありましょうが、基本的には、中国大陸から朝鮮半島の陸路を通し日本へ、という流れで伝来しました。

先ほど皆さんは学長先生の導唱で「三帰依文」を唱和されましたが、一部分はパーリ語の翻訳文で、皆さんの持っておられる光華女子学園『聖典』にも掲載されていますが、レジュメにその原文を紹介しておきました。

南方佛教（Theravāda［上座部佛教］）での継承事例として、パーリ語偈文二点を紹介します。

初めに『三帰依 Ti-Saraṇa』です。

Buddhaṁ saraṇaṁ gacchāmi,　　佛陀を拠り所として 私は歩みます、
Dhammaṁ saraṇaṁ gacchāmi,　　教法を拠り所として 私は歩みます、
Saṁghaṁ saraṇaṁ gacchāmi.　　僧伽を拠り所として 私は歩みます。

この偈文で注意願いたいのは「gacchāmi 私は歩みます」の内容で、決して「皆で」という複数形ではなく、一人称単数現在形語尾「-mi」で示されるとおり、「私個人の決意表明」です。

次に佛教精神を端的に表現している有名な偈文の一つ『法句経 Dhammapada』です。

Na verena verāni sammant'idha kudācanaṁ,
まことこの世では、怨みによって怨みは決して消える（しずまる）ことはない、
averena ca sammanti, esa dhammo sanantano.」
怨みより離れてこそ消える、これが永遠の真実（教法・基本）である。

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

この偈文に関するエピソードを聞かれた方も居られるでしょう。昭和二六（一九五一）年九月、サンフランシスコで開催された太平洋戦争終結の対日講和会議で、後にスリランカ大統領になられたジャヤワルデネ Jayewardene さんが、この偈文を引用して次のような演説をなさいました。

「スリランカは、ブッダの教説を享けて、日本に対する賠償請求権を放棄する」と。

この演説に、列席の各国代表者は深い感銘を覚えたそうです。この賠償請求権放棄発言は、スリランカの国民には有名なエピソードだそうですが、恥ずかしいことに肝心の日本ではこの事実の教育が欠落しているようです。

この偈文の内容は、佛教教理の基本と同様に、何も難解なことではありません。しかし難しくないからこそ実践に困難を伴う内容です。私どもはつい易きに走ってしまいがちで、苦しいことを避けて少しでも易しい方や便利な方に走ってしまいがちですね。そういう安易な傾向が、大切なことを忘れさせてしまうのでしょう。それだけに、釋尊の教説の底流には、誠実に生きることへの大切な姿勢や精神が満ち溢れているので私たちにひびいてくるのでしょう。

皆さんが、光華女子学園にご縁があったことは、この学園の基本姿勢、それは佛教精神ですが、佛教が何を教えようとしているのか、そこを学んで行くところに、皆さんの学ぶ基本があると思います。この学園での学びは、将来の皆さんにとり、家庭生活や教育の現場で大切な基本姿勢となって活かされるはずです。

東南アジア方面に伝えられたパーリ語主体の南伝佛教に対して、北伝佛教は、カシュミールやネパール、チベットなど中央アジア経由で、中国などで展開されました。サンスクリットを中心とした原典から、膨大な量のチベット語譯經典、漢譯經典、その他の言語譯經典が翻訳され、読経を中心とした勤行形式として、佛教儀礼が整備されています。

このような「三国伝来」による極東地点の日本では、特に「声明」として具体化していて、各寺院での勤行そのものが、「声明」で、「佛教音樂」であります。

古来からインドには、学問体系の基本的分類法として「五明 Pañca-vidyā sthāna」がありました。日本でも継承したその内容は、次の通りです。

五明（Pañca-vidyā sthāna（インドの学問体系に関する分類法）。

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

1　声　明　Śabda-vidyā　言語、文字音韻、文法に関する学問。
2　因　明　Hetu-vidyā　論理学、真理解明に関する学問。
3　内　明　Adhyātma-vidyā　自宗の教理、特に佛教の真理に関する学問。
4　医方明　Cikitsā-vidyā　医術（医学・薬学等）に関する学問。
5　工巧明　Śilpa-karma-sthāna-vidyā　工芸、芸能、暦数等に関する学問。

「声明」は、サンスクリット語「Śabda-vidyā」の翻訳で、言語学や文字音韻学、文法学もその内容とします。具体的には、「Śabda」が「声、音声」、「vidyā」が「明」です。すべての学問の基本ですので最初に配置されています。

「声 śabda」を「明らかにする vidyā」のが、「声明」ですから、「声を発する者から聴いてくださる方の心に明らかに伝わるもの」が「声明」です。伝わらなければ声明ではありません。勤行に参加している人々が一緒に声を合わせ合い、心をひびかせ合う。それが勤行です。残念なのは、日本の伝統的な勤行でのお経は漢文が中心なた

めに、僧侶、お坊さんだけの役割と思われています。本来「saṁgha 僧伽」というのは「一緒に集まる」という意味で、狭義の「僧侶」だけのことではありません。この講堂内も一つの「saṁgha」の世界なのです。

Ⅲ 《佛教音樂 その ひびき》—心から心へ（生命（いのち）の流れ）—

昨年までは、カセット・テープによる演奏を聴いていただいていましたが、今年は、ライブ演奏を聞いていただきましょう。これから演奏してくださる方々は、今年の一月から佛教讃歌を歌うグループとして月一度、東本願寺の近くで練習させていただいている混声合唱団で「アンサンブル・サンギーティ」有志の皆さんです。女声部には、皆さんの先輩の方々もいらっしゃいます。

「アンサンブル」は「共に、同時に」という意味であり、「サンギーティ」は先ほど説明した通り、「集まって歌い合わせる、確認し合う」ということですから、私たちの名前「アンサンブル・サンギーティ」は、フランス語・サンスクリット語などの

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

合成語でもあります。

「相手のひびきも聴き合える姿勢」ですから、自我主張の姿勢では不可能です。金子みすずさんのように、「みんな違って、みんないい」と感じ合える世界、それがサンギーティの基本姿勢です。

用意しました五曲中、一曲目と二曲目はコーラスで、三曲目もコーラスで歌いますが、演奏の後、お手元の楽譜で皆さんにも歌っていただきます。そして四、五曲目は再びコーラスでお聴きねがいます。

準備ができましたので演奏に入りますが、歌う方で落ちこぼれの私も、指揮のパートでアンサンブルに参加させていただきます。

最初に演奏する作品は、親鸞聖人の『正信偈』冒頭の二句「歸命 無量壽如來、南無 不可思議光」で、お念佛「南無阿彌陀佛 （Namo'mitāyus [ābhā]-buddhāya）」の漢訳と音写語です。 直訳的に意訳しますと、「人智では計量することの不可能な壽命や光明を特性とされる佛様に導かれて、生活して参ります」と言う意味です。

一　禮讃「無量壽」　親鸞『正信念佛偈』　清水　脩　作曲

歸命、歸命　無量壽如來、南無　不可思議光、南無　不可思議光

歸命　無量壽如來、　南無　不可思議光

私どものすべてが念佛の原語であるサンスクリット語を充分に理解しているわけではありませんが、私どもの演奏を通して、少しでも「南無阿彌陀佛」という原語の意味に触れていただけたとすれば、こんなうれしいことはありません。

二　人の世の（大谷樂苑選定 讃仰歌5番）　八谷　秋剣　作詞　服部　正　作曲

1　人の世の　朝ぼらけ　心澄み　思い　はるけし
青畑に　鍬ふるい　口ずさむ　み法の歌を

2　人の世の　真昼どき　身も浄く　力あふるる
海原に　漁りつ　法の声　浪に聞かん

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

3　人の世の　黄昏（たそがれ）や　　み教（おし）えの　まにまに汗し
家路さす　西の空　　輝けり　　み法の光
4　人の世の　静けき夜　　歓（よろこ）びは　　法の灯（ともしび）
鐘ならし　み名よべば　　現世（うつしよ）は　　いま浄土（きよきくに）

朝昼晩という一日の流れと、家族それぞれの生活を通して、日本の伝統的な一般家庭の日常を描写した作品でした。近年このような雰囲気が薄れているようですが、大切にしたい文化の一つです。それぞれのパートが役目を果たしつつ、アンサンブルを大切にする合唱も、よい家族関係を構成する一つの実習の場になりますね。お互いに相手の存在を認め合える世界は、自分の生き方を無限にひろげてくれるようです。

それでは三曲目の「バラバラでいっしょ～○△□のうた～」を会場の皆さんとご一緒に歌いましょう。はじめにコーラスで演奏しますのでお手元の樂譜をご覧になりながらお聞きください。その後、ご一緒にお歌いください。

三　バラバラでいっしょ　～○△□のうた～

和田　廣樹・智子　詞　　指方　浩　作曲

1
まる　さんかく　しかく
まる　さんかく　しかく
顔も姿も　ちがうけど
だから　とっても　おもしろい
大きな願いに　つつまれて
　バラバラでいっしょ
　バラバラでいっしょ
　　誰もが　今を　生きている

2
まる　さんかく　しかく
まる　さんかく　しかく
声も言葉も　ちがうけど
だから　とっても　楽しいね

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

一つの願いに　支えられ
バラバラでいっしょ
バラバラでいっしょ
誰もが　今を　生きている

3

まる　さんかく　しかく
まる　さんかく　しかく
夢も心も　ちがうけど
だから　とっても　素晴らしい
深い願いに　生かされて
バラバラでいっしょ
バラバラでいっしょ
誰もが　今を　生きている
バラバラでいっしょ
バラバラでいっしょ

誰もが　今を　生きている

ご協力ありがとうございました。皆さんのような若い世代も、私たちのような年配者も、それぞれの人々が、その個性や特性を認め合い、自分の人生を充実させていける世界があるのですね。皆さんもどんな形でも結構ですから、このようなアンサンブルを経験なさってみてください。将来を楽しく充実して過ごせるはずです。

次に大谷樂苑選定の讃仰歌から第一番目の「みほとけは」を演奏しましょう。皆さんお持ちの光華女子学園『聖典』には、メロディーだけですが、本来の混声合唱でお聞きください。宗派を超えて歌われる味合い深い作品です。

四　みほとけは　（大谷樂苑選定 讃仰歌1番）

仲野　良一 作詞　　信時　潔 作曲

1　みほとけは　　まなことじて　　み名よべば
さやかにいます　わがまえに　　さやかにいます　わがまえに

2　みほとけは　ひとりなげきて　み名よべば
　笑みてぞいます　わが胸に　笑みてぞいます　わが胸に
3　みほとけは　慕いまつりて　み名よべば
　包みています　わがいのち　包みています　わがいのち

この作曲者、信時　潔は、山田耕筰より一年後輩で、皆さんの学園歌の作曲者です。「海ゆかば」という荘重なレクィエム（鎮魂歌）を書かれた方です。第二次世界大戦のとき、この曲のすばらしさに魅せられて、護国のため戦争へ行った若者が少なくなかったそうです。戦後それを知られた信時先生は、クリスチャンですが、「若い人を戦場に送った責任」を感じられ、若干の校歌を除いて作曲の筆を折られました。

昭和二〇（一九四五）年八月一五日、六千万人もの死傷者を記録した過酷な第二次世界大戦が終結しましたが、これまでの国家体制を根底からくつがえされた日本の社会は、初めての敗戦で絶望的な混乱の極みにありました。昭和二二年三月、当時の東本願寺法主大谷光暢・智子夫妻は、その混乱を音楽の力で復興したいとの願いをこめ

て、大谷樂苑を創設されました。翌年六月には、公募した歌詞による新たな佛教讃歌十曲を制作発表しています。その第一番目が、この「みほとけは」でした。

筆を折っておられたクリスチャンの信時先生が、この佛教讃歌を書かれたのです。私にはこの作品に、「海ゆかば」に共通の深い願いを感じます。皆さんの学園歌はそういう方がお書きになったことを覚えておいてください。

本日最後の曲を演奏しましょう。

五　みめぐみの　（大谷樂苑選定　讃仰歌3番）

河合　恒人　作詞　　古関　裕而　作曲

1　みめぐみの　光にぬれて　蓮池に　花はま白く
　みほとけの　生命かおりて　現世に　美しき花は開きぬ

2　まろき虹　空にかかれる　七色の　橋をわたりて
　みほとけの　み手にいだかれ　遥かなる美しき国をめぐらん

3　わがこころ　うれいなき華　永久の　母をしたいて

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

みほとけの　み名となえつつ　もろともに美しき道をあゆまん

ご静聴ありがとうございました。いかがでしたか。明治時代以降、西洋音樂に影響されて、佛教讃歌がたくさん作られておりますが、あまり知られていないのが残念です。私どもの演奏は、声の良し悪しの伝達ではなく、「佛教音樂の本当のひびきに触れたい」という願いを求めながら、聴いてくださる方々にも、ぜひ実感し合っていただきたいとの願いそのものです。

先ほど、お寺の役目は決してお葬式だけではないと申し上げました。こういう作品がありながら、私ども僧籍にある者にも、不勉強も含めて紹介して来なかったという反省もありますが、いつかまたご縁がありましたら聴いていただき、そして参加していただき、広められて行くことを念じております。

「バラバラでいっしょ」や「みんな違って　みんないい」と同じように、生き方は違うけれども、実は「それぞれの人生を全うしたい願いは一緒」と、未知の世界を教えてくれる「ばらばらでいっしょ」のすばらしさが実感されて来ることでしょう。

Ⅳ　むすび　佛教音樂その目的

―心にひびき伝わるもの（眞実の生命との出遇い）―

今日のまとめとして、「佛教音樂の目的」「心にひびき伝わるもの」と書きました。「心にひびき伝わるもの」とは皆さん自身以外に、実は「皆さん自身の心奥」にも存在しているのです。「自分のことはちゃんと解かっているわ」と思って居られる方が多いかも知れません。しかしそれは現在までの自分の一部分だけであって、「本当の自分」にはまだ気がついていないんです。皆さんの内面に秘められている本当の可能性にまだ気がついていない。その「本当の可能性」に気づくこと、それがブッダ（佛陀）、佛様、目覚めた者、悟った人という本来の意味です。皆さんの中にある「本来の自分」に気がついていく。本来のものと出遇っていく。それが皆さんのこれからの歩みであり、同時にその事実に気付かせてくださるのが「佛教、ブッダの教え」であります。理屈で覚えるのではなく、自分で苦しみながら、悲しみながら、喜びながら

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

「本当の自分って何だったのか」に気付いてゆく。今のレベルでよかったのかなという反省も含めていきますと、かならず新たな自分に出遇えるはずです。参考までに先達の方々の教言を少し引用させていただきました。

1　教言引用［「真実」についての教言（言葉）］

『Von Herzen – möge es wieder – zu Herzen gehen.（心から―そして再び―心へと伝わらんことを）』
(Beethoven [1770～1827])

『お浄土は　音樂の世界ですよ』
（金子　大榮［1881～1976］）

『抱かれて　ありとは知らず愚かにも　われ反抗す　大いなる御手に』
（九條　武子［1887～1928］）

『本当のものがわからないと　本当でないものを本当にする』
（安田　理深［1900～1982］）

『自分の眼を明るくするのが勉強だが、眼をふさがれたり　曇らされたりする勉強をしてゐて、勉強をしてゐると思ってゐる事は　ないだらうか』

（中川　一政［1893～1991］）
（相田みつを［1924～1991］）

『自分の番 ―いのち の バトン―』

父と母で 二人　父と母の両親で四人　そのまた両親で 八人
こうして数えてゆくと　十代前で 一〇二四人　二十代前では・・・？
なんと百万人を超すんです
過去無量の　いのちのバトンを受けついで　自分の番をいきている
それが あなたの いのち です　それが わたしの いのち です

『美しき色 あれど香のなき花のごと いのちなき言の葉 いと さみしかり』

（某 師）

2　ひとつの 願い

最後に「本当の自分」との出遇いにつき、私の所感や願いをお聞きいただきます。

イラクの問題も含めて、戦争というものは、相手との違いを理解しないところから始まりますね。相手との相違に気がついた時に、自分は相手によって「別な自分に出

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

遇っている」ことになりますね。意識はしませんが新たな自分に出遇っている。新たな出遇いを感ずることが、どれだけ自分の世界を開放することができるか、大切な機縁となります。

佛教の基本的用語の中に「縁起」がありました。「縁起」というのはいろんな要素が集まって一つのものが成り立っていることでした。皆さんの頭部や左右の両手足をはじめ、身体の各部署が、それぞれの機能を果たして共通の一つの言動が成り立っている。共通の目的を持ってそれぞれの存在があります。

同じように細胞の中にもいろんな細胞があり、時々、悪性の腫瘍となったとき、癌などと診断されるのですね。しかし、それは他人の細胞ではなく、自分の細胞なのですね。自分の細胞が病気になり、癌と診断された事実に対応するのは、他でもない自分自身です。

三日前の六月二三日、ハンセン病患者の詩人　塔 和子さんをテーマにしたドキュメンタリー映画「風の舞 ―闇を拓く光の詩―」の完成披露試写会が東本願寺視聴覚ホールでありました。完成記念上映会は七月九日、京都駅前のアヴァンティ・ホール

で開催されるそうです。ハンセン病で虐げられていた方々が、ハンセン病だけではなく如何なる場合でも同じですが、社会から差別され一方的に虐げられていた方々が人間としての生命の尊厳を生ききったドキュメントです。

先年小泉さんが首相になった時、熊本地裁でハンセン病患者の方の訴訟があって勝訴しました。昨年二月、ＮＨＫの「にんげんドキュメント」で、「津軽　故郷の光の中へ」という番組が放映されました。櫻井哲夫（本名　長峰利造）さんという青森出身の七七歳の方が、六〇年ぶりに自分の里に帰られたときのドキュメントでしたので、ご覧になられた方もありましょう。その方は、ご両親のお葬式もお兄さんのお葬式にも参列できませんでした。当時はハンセン病は伝染病との認定のため、本名すら名乗れない状態で、法律的にも一般社会から完全に隔離されていたためです。

六〇年前、発病する前の長峰さんの写真が、かわいらしい普通の少年姿で紹介されていました。六〇年ぶりの里帰りは、国の謝罪声明が背景にありましたが、実家の当主（甥）家族、特に甥夫人の受け入れ希望による実現でした。県知事や少年時代の遊び仲間だった町長が行政責任者としての謝罪表明をしましたが、六〇年前の記憶が

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

「郷里への道」を辿る長峰さんに、不思議にも呼び覚まされたような印象の報道でした。

行動をサポートしてくれるボランティアの金　正美（キム・チョンミ）さんに説明しながら、家業のリンゴ園や、自宅への道を辿る長峰さんは、両手十指が第三関節から欠落し、右目眼窩も完全に喪失、辛うじて残っている小さな左眼の視力のみという身体的障害を持っておられました。それにもかかわらず、終始尊厳性に満ち溢れた柔和な応対や行動でした。

六〇年ぶりの自宅では、迷うことなく佛壇に直行され、指の無い両掌に数珠をかけられ堰を切ったようなお気持ちでご挨拶されました。

「父さん・母さん、兄貴、葬式にも参れなくて、堪忍してくれ」。

涙を流しながらの、そして恨み言の一切ない長峰さんの精神的深さを湛えた姿勢に、胸をえぐられるような痛みと共に、救われる思いを実感しつつ拝見し、拝聴しました。

長峰さんのこの深い柔和な姿勢を明確に知らされたのは、一七歳で発病した長峰さ

んが、強制的に東京の施設へ隔離させられる日、両親との別れのとき（結果的には今生の別れ）、父親が語られたという最後の言葉を拝聴したときでした。

「利造 許しておくれ。ライ病は父さんや母さんが願ったものではない、ましてやお前が願ったものでもない。天がお前に与えた天職だとは思えないだろうか。」

七七歳になられた長峰さんが、テレビの取材者と金さんに語られた言葉にも深い味わいがありました。

「この娘さんは、私のために涙を流してくれるんですよ。

私は施設の中で生活するので、苦労は少なくで済むが、あんたはこれから社会の中でいわれの無い差別を受けるだろう。可哀相だがどう乗り越えてゆけるか、それは自分で見つけるしかないんだよ。」

長峰さんは、数多くの詩作をなさって来られたそうですが、「おじぎ草」という次のような内容の詩が紹介されました。

オジギソウは、自分を手折った相手にも頭を垂れると言う。　私の指を奪ったラ

『真實心』第二十五集平成15年度2004年3月発行（京都光華女子大学）

イという病気にお辞儀してゆく世界を教えてくれたオジギソウに お辞儀した。

オジギソウを見て「ライという病気に素直に頭を下げられる、そういうような自分になりたい」との精神的境地は、一七歳で別れたお父さんの最後の言葉に帰結するものではないでしょうか。

自分に関係する困難な事象は、人さまが解決してくれるものではなく、自分自身が解決するしかないということなのでしょう。そのようになれる自分をどういうふうに確立していくか。それが学ぶということの大切な姿勢でありましょう。学生時代に、そのような基本姿勢を学べる場所が、佛教精神に基づいた光華学園です。この大学にご縁のあったあなた方、どうぞ、ご自分たちの人生を花開かせるためにも、佛教とは何だったのかを学び、「本当の自分」に出遇ってください。

これからは、あなた方の時代です。自分たちの明るい将来を切り開いて行けるかどうかは、あなた方次第です。「幸せな人生を全うすることができたわ」と思えるような将来をぜひお創りいただきたいと思います。長時間、ご静聴ありがとうございました。

――二〇〇三年六月二六日――